

特集

# 「教育と情報通信技術 (ICT)」 特集号について

竹村 治雄<sup>†1</sup> 西田 知博<sup>†2</sup><sup>†1</sup> 大阪大学 <sup>†2</sup> 大阪学院大学

教育における情報通信技術の利用は、情報教育教室やCALL教室などのコンピュータを用いた教室が整備されるに従い拡大した。その上でのCBT (Computer Based Training) と呼ばれるコンピュータを用いた教育ツールが盛んに利用されるようになり、やがて、インターネットの普及に伴い、WBT (Web Based Training) が一般的になった。これに伴い、それを支えるCMS (Course Management System), LMS (Learning Management System) の導入も一般的になった。現在では、大規模公開オンライン講座 (Massive Open Online Course(s) — MOOCs) と呼ばれる、ICTを利用して大人数の受講者に教育を提供するサービスが注目を集めている。またICT活用の範囲は、大学のみにとどまらず、初等中等も含めた幅広い教育分野に広がってきている。

本特集では、教育におけるICT活用に関し、教育内容の紹介だけではなく、教育コンテンツを作成する体制づくりや、翻訳などを含めたプラットフォームの整備など、教育を支えるプラクティスにも焦点をあて紹介している。

常盤氏による論文「教育用オープンソースソフトウェア群のローカライゼーションと共通翻訳メモリの開発——貫性のある用語による教育支援システムを目指して——」は、大学教育で用いられる学習管理システムなどの英語圏で開発されたオープンソースソフトウェア (OSS) を、一貫性を持って翻訳するためのプロジェクトを紹介している。教育用のOSSは広く使用されているが、インタフェースとして表示される文言等の翻訳は特定のボランティアに依存し、コミュニティに閉じたものになりがちであった。これを、各OSSのコミュニティを横断した体制を作り、共通の翻訳メモリを作成するなどにより翻訳を進めていったことは、学習者に使いやすいシステムを提供し、ICTを用いた教育を推進するという点で非常に重要な意味を持っている。

重田氏による論文「MOOCプラットフォームを利用した大学間連携教育と反転授業の導入—北海道内国立

大学教養教育連携事業の事例から—」は、広く学外に公開するオンライン講座のMOOCや、学内などに限定公開するオンライン講座のSPOCに提供する教材を、北海道大学でどのように作成しているかについて紹介している。インストラクショナルデザイナーの職員を含めた体制でどのように教材を開発しているか、著作権処理をどのように進めているかなど、同様の教材開発を考えている読者にとって大きな参考となるプラクティスの紹介である。

上田氏らによる論文「倫倫姫プロジェクト—学認連携Moodleによる多言語情報倫理eラーニング—」は、大学等を対象とした情報倫理のeラーニングコンテンツ「倫倫姫」の開発・運用について紹介している。大学においても情報倫理に関する教育は重要であるが、実際には内容がおざなりであることも多い。このような問題意識のもと、これは国立情報学研究所が中心となり策定した「高等教育機関の情報セキュリティ対策のためのサンプル規程集」に準拠した標準的な教材として開発されている。また、留学生に対応するため日英中韓の4カ国語に対応していること、コンテンツの開発にとどまらず、学術情報フェデレーション (学認) 参加機関が共通に使用できるCMSを構築し、多くの機関で利用できるようにして、その普及に努めていることは注目する点である。

原田氏による論文「プログラミング言語ビスケットを用いた基礎としてのプログラミング教育の提案と実践」は、ビジュアルプログラミング言語「ビスケット」を用いた教育について紹介している。子どもへのプログラミング教育がブームになりつつあるが、ここでは「プログラミング」というスキルを教育するだけではなく、それを通じてコンピュータの基本原理や特性が理解できるよう、著者独自の視点で行っているプラクティスの紹介が非常に興味深い。

最後に著者の有志の方をお招きして座談会を設けさせていただいた。座談会に参加いただいた先生方は、教育にかかわるセンターに所属しており、教育の中でICT

を活用するためのいろいろなノウハウをお持ちであるので、その一端を紹介していただいた。一方で、そのようなノウハウが蓄積していくがゆえ、その場所から逃げられなくなるということも問題点として話題に上がった。このようなノウハウをプラクティスとして共有し、次へつないでいくことが不可欠であり、デジタルプラクティ

スという発表の場が、その重要な役割を担うということが参加者の共通した認識であった。読者にも、教育の場においてのさまざまなノウハウを持っておられる方が多いと考えるので、今後、デジタルプラクティスやトランザクション「教育とコンピュータ」などの場を用い、それらを共有していただくことを期待したい。

---